

写された作文

二時間目、国語の授業が始まりました。一人一人に原稿用紙が配られた後、先生が言いました。「先週、一泊二日の海の学習に行きましたね。たくさんの思い出ができたと思います。この時間は、印象に残っていることや楽しかったことを作文に書きましよう。」

「えー」「いやだなー」同じ班の太郎君と健二君は目を見合わせて、小さな声で言いました。海の学習は二人にとって、楽しい思い出で一杯です。でも、作文になると話は別です。太郎君も健二君も作文や日記が大の苦手だったのです。

まわりの友だちは、さっそく鉛筆を手にして書き始めています。それを横目にしながら時間だけが過ぎていきました。太郎君と健二君の原稿用紙は真っ白なままです。

同じ班の花子さんも文章を書くことがあまり得意ではありません。でも、頑張り屋の花子さんは何度も書いたり消したりしながら、海の学習の様子を思い出して、少しずつ原稿用紙に文章を書き込んでいました。太郎君はあせりました。どんなことを書いていいのか浮かんでこなかったのです。隣の席の花子さんをのぞき込むと完成間近のようでした。

「花子さんの作文を見せてもらおう」

太郎君は見せてもらうだけと思っていました。花子さんの作文をのぞいているうちに、ついそのまま写してしまいました。もちろん花子さんには何も言っていない。花子さんも太郎君が写していることには気付いていません。

太郎君の原稿用紙のマス目はどんどん埋まっていきます。ところどころ出てくる友達の名前は変えましたが、あとは花子さんの作文とそっくりです。

健二君は、そんな太郎君の様子を横目でちらちらと見ていました。自分も、花子さんの作文を写そうかと考えました。しばらくして、健二君は思い切って花子さんに話しかけました。

「花子さん、ぼくどんなことを書いていいのか思いつかないんだ。花子さんの見せてもらっていいかな。」

花子さんは少し驚きました。しばらく迷いましたが、真剣な顔で頼んでいる健二君を見て、「いいけど、私、作文上手じゃないわよ」と答えました。

最初、健二君は花子さんの作文を写そうと思っていました。でも、何度も書いたり消したりしながらがんばっていた花子さんのことを考えると、そのまま写すことはできません。それに花子さんの作文を見て書きたいことが少しわかってきたような気がしました。健二くんは、できるだけ表現の仕方を変えたり自分の気持ちを書いたりするようにしました。出来上がった作文は、健二君の素直な気持ちが見れていました。

翌日、国語の授業に一人ずつ作文を発表することになりました。黒板の前に立った健二君が最初に読みました。読み終わった健二君は花子さんを見て「花子さんありがとう」とにっこりとして言いました。花子さんはなんだか心が温かくなりました。

太郎君の番になりました。なんだか顔色がさえません。いつもの元気な声でなく小さな声で作文を読み始めました。

太郎君の作文を聞いていた花子さんの目からみるみる涙があふれ、大きな泣き声が教室に響きました。